

民俗建築アーカイブ ④

昭和 27 年の岡山県苫田郡富村—その一 森江いよ家住宅 —

日本民俗建築学会アーカイブ担当

岡山市を流れる旭川は、その源が 60 km 離れた中国山地の湯原湖にある。周辺から流れる水をせき止めて造ったダム湖である。湯原湖を発した旭川は 10 km ほど先の久世町で、一筋違う谷間から流れる目木川と合流する。目木川は入道山 (1040m)、乗幸山 (1172m) から流れ出る総長 15 km くらいの小さな川であるが、久世で旭川に飲み込まれて消える。昔、この小さな川の上流に富とみという村があった。岡山県苫田郡富村とみそだである。周辺は 1000 m 級の山が連なり、土地の 90% は山林である。その昔はたたら製鉄の盛んな地で、古代史にも登場している。富という字がついているくらいだから、栄えた地域であったにちがいない。

この地は明治 22 年 (1889) に富西谷村、富東谷村、富仲間村、大村、楠村の 5 村が合併し、富村とみそだとなった。そして平成 16 年までの 100 余年間、人々は谷間の狭い田畑を耕しながら先祖伝来の土地を守ってきた。

平成 17 年 (2005)、富村は世の流れにならって、近隣の奥津町、上齋原村、鏡

野町と合併して新たな鏡野町になり、富村の名前は表から消えてしまった。今は僅かに富西谷とか富東谷という地名が残されて、かつての富村の面影が偲ばれるだけである。

さて、その鏡野町富西谷 118 に国指定重要文化財「旧森江家」が移築保存されている。消えた富村の遺伝子がささやかな形で残されたものである。そして、たとえ小さな形であるにしろ、この遺伝子を残すことに懸命に努力した人がいた。本学会前会長佐藤重夫である。

佐藤重夫氏は昭和 27 年にこの地を調査し、90 枚の写真を残している。昭和 27 年といえば戦後間もない頃であり、都市は疲弊していたが、さすがに中国山地の小集落は戦災を受けた様子もなく、昔の山村の原風景を残していた。

当時、佐藤氏は広島大学助教授に赴任して 3 年目、意気盛んな 40 歳の頃であった。佐藤氏が残された膨大な資料の中に「富村民家調査研究」(二七、夏実施)と記したファイルがあった。このおかげで富村調査の経緯いきほひを知ることができた。それをもとに当時の富村を掘り起こしてみよう。

その頃、詳細は不明であるが岡山県瀬戸内海総合文化研究会という会があって、佐藤氏はその会に参加していた。

そのファイルの中に次の一文が残っている。

「瀬戸内海総合文化研究会は、27年度事業の一つとして大部落の総合調査を実施したが、これは一つの山間部落を人文的、また、自然科学的及び技術的の各方面より調査し、こういった山間部落の実態を調査しようという目的のものであった。私は建築及び民家建築の部面を担当して、これに参加したが、その目的もまた、同様である」と記述されていた。

昭和27年といえば広島大学建築学科の一期生がようやく4年生になったときである。その何人かを連れて佐藤助教授は調査に乗り込んだのであろう。佐藤氏が調査対象とした富村大部落は、上部落、中部落、大部落^{しも}下の三地域に分かれていた。更に東谷、西谷、楠という地域も隣接している。

上部落は目木川の上流の地区で、平地はほとんどないが、川下になる中部落や下部落では水田や田畑が広がっている。大型の民家もあって山間の小集落にもかかわらず、富村の名にふさわしい豊かさが写し出されている。

図1は佐藤氏が昭和27年の調査時に描いた富村大部落上・中・下地区の家屋位置図である。全43戸の民家を調査しているが、この中で下地区の41番の民家が森江いよ家で、佐藤氏が特に注目して調査した民家の1軒である。その森江家が、調査から10年後の昭和38年、取り壊されるという情報が佐藤氏に届いた。驚いた佐藤氏は単独で森江家の緊急調査に取

り組んだのである。その報告を昭和38年の日本建築学会 中国支部に発表したのであろうか、原稿の下書きがファイルの中に見つかった。以下がその記述である。

「森江いよ邸は、38年4月に同家改築のこととなり、急に解体し、何とか復原保存を民俗資料としても計るべきだと私考したので、直ちに現地に行って、改めて調査を行った。(中略)尚ほ(ママ)解体された主要古材は、山陽テレビ社長谷口久吉氏及び岡山県教委、社会教育課文化財係の厚意によって、取敢えず一応岡山に運び保管中で、後日然るべく再建するよう考究中である」とある。

佐藤氏が直ちに現地に行き調査したのは、昭和38年4月24日である。当時は民家の保存意識は薄いときであったが、佐藤氏は先ず学術調査で建築的価値を明らかにし、保存運動に奔走して、その結果重要文化財として残ったものである。ただ復元に到るまでの経緯は調べきれていないが、解体保存中の昭和44年6月20日付で国の重要文化財の指定を受け、昭和51年4月に現在地へ移転復元を完了した。

佐藤氏が最初に調査した昭和27年から24年が経っていた。

さて、昭和27年と昭和38年の2回にわたって調査し、残した合計139枚の写真は、今はすべて消滅した集落民家の記録である。

本企画では2回にわたって主要な写真や記録図を取り上げて解説を加え、紹介するものである。第1回は森江家住宅について紹介する。

森江家住宅の特徴

旧所在地：岡山県苫田郡富村大字大 70

現所在地：岡山県苫田郡鏡野町富西谷 120-4

佐藤氏の学会発表草稿をもとにして、森江家住宅の特徴を以下にまとめる。

鏡野町に移築保存されている旧森江家住宅を見ると、昭和38年に調査した森江家の外観と大きな違いがある。移築保存されたものは江戸期の姿に復元されたものである。その復元の根拠になったのは佐藤氏の論文である。佐藤氏は森江家住宅を「享保17年頃と思はれる」と推定している。佐藤氏は復元について以下のように考察している。

「森江いよ邸は現状は図(間取り図参照)のようになっていたが、中の間は後補で、もともとは広い板の間で、その北側に莫^も座敷の勝手の間(料理の間)と連なった一つの空間であったと思はれる。ただ、この間に一部建具が用いられていた。然し座敷と納戸、広間、内庭の三間取りであったこと、扱^あ梁間は2間で、もともとは梁行3間半×桁行7間半の建物であったことが諸種の痕跡からさぐられるものである。先づ内庭北壁は現在の壁が半間外方に広められたことが、内側に並列している柱の貫跡及び小舞跡で明瞭に解る

他、勝手納戸境の柱上部の通貫跡にも見える。次に納戸西壁はその柱の貫跡や小舞跡で全て壁で囲まれていたことが解る。他、妻の側に袖壁が外部に出ている、外部から使用する場所が作られている。次に座敷は現在10帖でその室内に柱が一本建っているが、この柱の四周の張り板を除いてみると、その柱の北側には貫跡と差物鴨居跡と二様あり、もともと壁で、納戸西側のように外部より使う空間であったものを後に押入としたものか、と思われる。また、この押入の北側には上下二段の戸棚になっていたことが、敷鴨居の跡で解る。また座敷の南は一間の開孔部で、柱が元あったものを切って差物で現在上部の柱部分を支えており、要するに座敷は6帖の間であったといえる。畳寸法は6尺3寸で出来ている点からいって、この室のみは元来畳のものであったと考えられる。座敷南縁はくれえんで外に建て具はなく、広間の南側もぬれ縁が付いていたと考えられる。現在はこれらが全て、通った縁側に改造されその外に雨戸が建ち戸袋がついてしまった。内庭外部の便所や風呂の如きものも、もともとか否かは疑問があるものかと思はれる。内庭、厩、ひやの部は殆んど創めと変化ないものと考えられる」と、考察している。

また、歴史的考察を以下のように述べている。

「大部落で最も年代の古い農家建築は森江いよ氏及び森江秀雄氏宅と思はれる。森江秀雄氏宅の建築年代は、現在生存している子として90歳に当たる（昭和27年）老人（数年前死亡）が伝えていたのによると、二つ前の〇〇*1の申年に麦2斗5升を以て作ったと云うことである。又、森候作事手伝に当たった先祖が辨当り*2に入れて持ち帰った松が凡そ200年以上の大木（根回り9尺5寸、35年前伐採）になっていたとも云い、これ等を総合してみると250年乃至175年前と凡そ考えられる。この家の近年増築された部分と改造した中の間の部分を除くとニワとデイ、ナンドの間に広い板の間があり、ここに炉がある形で、材料は全て栗で大黒柱は8寸5分角、他の柱共手斧削りであり、曲材も多い。北壁柱列上には桁はなく直接に梁がのっており、古式の未発達構造の名残を止めている。また、陸梁上にはヤマト土をのせている。森江いよ氏宅はデイを拡張した部分と縁側とナカノマトを除けば創建のままと考えられて、森江秀雄氏宅と左右逆の配列ではあっても間取の基本は同様である。材料もまた同様に全部栗であり、且つ手斧仕上げである。又合掌（扱首）は秀雄氏宅が上端柄差になっているのに対し、この家では重ねて結んであるに過ぎないし合掌もいちぢるしく外方に即ち妻側へ傾いて、古風な構造方法と考えられる。建築年代について確実な資料はないが、こ

の家は秀雄氏宅の本家であるとも云い、裏の倉は宝暦14年の棟札をもっている点から見て主屋はそれ以前即ち少なくとも200年前と考えることができるものである。同じ規模の家でありながら、これは秀雄氏宅より柱等の仕上が上等に出来ている点から見ても前宅より僅かおくれるものかも知れないけれども、然し殆んど同じ年代のものと考えて支障はないと思はれる」と、述べている。

注

*1 二文字不明

*2 弁当行李のこと。はこ柳や竹を編んで作った弁当箱

謝辞 本稿に掲載した鏡野町富西谷の「旧森江家住宅」の写真は、鏡野町教育委員会日下隆春氏のご協力を戴いたものである。また、日下氏には本稿についての好意のご評価も戴いた。ここに記し謝意を表す。また、昭和27年当時の富村の方々には多大なご理解とご協力を戴いたものと思い、ここに謝意を表すものである。